

LAからのオススメ本リスト

【観光 - 観光の現場で働く人たち】

書名	著者 (出版社)	本について、ラーニングアドバイザーよりひとこと	図書館での 資料番号
観光通訳ガイドの訪日ツアー見聞録 ドイツ人ご一行さまのディスカバー・ ジャパン	亀井尚文 (交通新聞社新書)	これからのインバウンド観光に必須の通訳ガイドの体験記です。文化やものの考え方の違いを実体験から書かれています。	51062392
添乗員疾風録	岡崎 大五 (角川文庫)	海外旅行専門の添乗員が書いた海外ツアーエッセイです。事実かフィクションかわからないくらいのハプニングが次々と描かれています。	*42181375
「はとバス」ヒットの法則23	江沢 伸一 (潮出版社)	東京観光の定番となった「はとバス」のツアー企画者が書いた一冊です。ツアー作成方法やツアー作成の裏側、企画のノウハウがまとめられています。	51077013

【観光 - 観光の現場で働く人たち・インバウンド関連】

通訳ガイドがゆく	ランデル 洋子 (イカロス出版)	通訳ガイドとは？から仕事の流れ、英語でのコミュニケーションのコツまで、通訳ガイドのアレコレを知ることのできる一冊です。	*52342530
「澤の屋旅館」はなぜ外国人に 人気があるのか	安田 亘宏 (彩流社)	訪日外国人観光客に人気のある「澤の屋旅館」をマーケティングの視点から分析した一冊です。訪日外国人旅行者の受け入れに大きなヒントを与えてくれるでしょう。	51044694

【観光 - インバウンドについて】

インバウンドビジネス入門講座	村山 慶輔 (翔詠社)	インバウンドビジネスのノウハウが書かれた本です。内容も簡単にまとめられていて、わずかな時間でも読めます。	51102467
新・観光立国論	デービッド・ アトキンソン (東洋経済新報社)	日本居住のイギリス人である著者が、日本の観光立国推進への問題点の指摘と提言をおこなった一冊です。賛否両論あるとは思いますが、考えさせられる点もあります。	51083258

【映像身体 - 読んだら引き返せない映画批評、はじめの5冊】

書名	著者 (出版社)	本について、ラーニングアドバイザーよりひとこと	図書館での 資料番号
『反＝日本語論』	蓮實重彦 (ちくま学芸文庫)	どうしてこの書物を「紹介」することなどできようか、などとつぶやきながら『映画の神話学』を名指し、その文体的戦略を模倣することなどもはや許されてはいない世代に属する我々は、ハスミ光線を直接に浴びた者たちではなく、反＝蓮實を模索する者たちでもなく、むしろ単なる「蓮實ファン」としてまずこの一冊を紐解こう。『映画誘惑のエクリチュール』や『シネマの記憶装置』や『映像の詩学』をここに並べるよりも、おそらくその方がいいはずだ。	51104555
映像のカリスマ[増補改訂版]	黒沢清 (エクスナレッジ)	ある考え方によれば、批評には3つの段階がある。まず固有名詞との遭遇。例えば、トビー・フーパー。次に、形容詞をめぐる問い。例えば、それはなぜ「面白い」のか。そして次に、動詞による思考。つまり、熱狂はエル・パオに達す。その達した瞬間、炸裂する問いの破片に心臓を撃ち抜かれぬ者は、残念ながら未だ映画とは無縁である。冒頭の登場人物紹介に爆笑できる者だけにこの門は開かれているが、誰もが今すぐにでもそうした存在に「なる」ことができるということもまた真である。単に門をくぐればいいからだ。	51033597
シネマ21 青山真治映画論+α 集成 2001-2010	青山真治 (朝日新聞出版)	明晰な理論と卓抜した想像力が交錯する前半部の面白さ。エピソード一つ一つの見事なストーリーテリングに舌を巻く後半部の軽さ。この圧倒的な面白さと軽さは、徹底して対象に〈なる〉ことに努めるという倫理的な姿勢に基づいている。イーストウッドは、スピルバーグは、ゴダールは、なぜこのように画面を提示したのか。他者としてのスクリーンに真摯に向き合うこと。それは、歴史に根差すという一貫した意志に拠る戦略に他ならない。	51045835
再履修 とっても恥ずかしゼミナール	万田邦敏 (港の人)	選出にあたり再読(再履修)したが、己の恥ずかしさに身悶えせんばかりの数箇所があったことを告白しておく。twitterやらブログやら、わけ知り顔の厚顔無恥がはびこるこの現代に、無知蒙昧ならいざ知らず、光線を浴びてしまった毒虫たちは、恥を忍んで撮るほかない、書くほかない。切断と持続に引き裂かれつつ、そのじつ、身も引き裂かれんばかりの恥ずかしさを引き受けることこそ、映画(史)への宣戦布告ではなかったか。大胆不敵！踵を蹴られて赤面せよ！	51046135
映画の生体解剖 恐怖と恍惚の シネマガイド	稲生平太郎、高橋洋 (洋泉社)	手術台に始まり、放電、水、悪、パラノイアといった自由連想的な主題の展開で、古今東西のホラー、オカルト、SF映画を縦横無尽に引用しつつ、画面の中に「ヤバい」ものが降りてくる瞬間にひたすら迫ろうとする、欲望の書。そもそもこれは批評だろうか。だがこの荒唐無稽が、ときどきふと核心に触れているような感じがするのが危険であり魅力でもある。そういえば映画とはもともと荒唐無稽なものではなかったか、なーんてね。	51075621

★本を予約される場合は、右端の資料番号でOPAC検索下さい。